

現代葬儀考

同級生や同期生の訃報が相次いで、いよいよ自分も周りにご迷惑をかける年ごろになったことを実感している。そんなとき、新聞記者時代のライバルだった柿田睦夫さんから『現代葬儀考』（新日本出版社刊）という新著が届いた。日本共産党の機関誌「赤旗」の連載記事に加筆したもので、やさしい文章にひかれて一気に読んでしまった。

何といっても、いざというときに役に立つ情報が多く、わが家族にも勧めることにした。たとえば、葬儀社に頼むときは「初めてなので」「何も分からないから」「お任せしま

善	南
財	無

すがわらのぶお
菅原伸郎

東京医療保健大学教授

す」の三つが禁句だそうだ。これらを口にする、足元を見透かされ、当初の料金にさまざま「オプショ

ン」がつけられ、費用はたちまち十万円単位で跳ね上がる。
戒名の「値段」について、遺体運送のシステムについて、なんと知らないことばかりだろう。厳粛に見える葬儀がその裏ではいかに消費経済に組み入れられているか、社会部記者の目で報告されていく。病院の霊

安室から葬儀場へ、火葬場から墓石に入れられるまで、いや、その後々までも死者は商売の材料なのだ。しかも、古くからの因習や迷信が巧みに利用されてもいるのだから、これではうかつに死ねないなあ、という気分にもなってくる。

読むうちに、伝統仏教は何をしているのか、とも思えてきた。本書の指摘を待つまでもなく、葬儀の段取りが「業者」に牛耳られていることは齋場でしばしば感じてきたことだ。現われた僧侶はそそくさと読経をすませ、自分自身の用意も宗祖の教えも語らないまま退席していく。読経そのものにも特別な感動はなく、かえって葬儀社員が務める司会役の、少々芝居がかった語り口に参

列者からすすり泣きが漏れる場合もある。「説教なんかしていたら、葬儀社から声がかからなくなる」と弁解する僧侶もいるが、一在家としては日本仏教の行く末がいよいよ心配になるのである。

宗教担当の経験が長い柿田さんは、いわゆる「葬式仏教」を蔑んではいけない。葬儀という貴重な機会を死や人生について考える契機として生かすえず、しかも制度や矛盾をそのままにしている仏教界の無気力ぶりを嘆いているようなのだ。

「赤旗」に連載されたのだから、一応、これ以上にラディカルな立場はないことになるが、意外にも伝統や習俗の価値を認めてもいる。たとえば四十九日や一周忌の法事も癒しの

ステップとして評価しており、昔ながらの左翼や唯物論者は拍子抜けするかもしれない。

林の中にある樹木葬の現場から、創価学会の巨大な池田記念墓地公園まで、筆者は丹念に足を運んできた。僧侶や牧師はもちろん、それぞれの業界にも「故人にふさわしい、これからの葬儀」を模索する人がいて、そうした事例もさまざま紹介されている。ふえている「海上散骨」にしても、墓を造らない南アジアや

チベットの仏教、あるいは自らの遺体を賀茂川に流すように言い遺した親鸞を思い起こすなら、さほど違和感はない。大胆ではあっても多くは簡素で質素な試みであり、これこそが仏教本来の姿ではないか、とも思えてくるのだ。

これまで『霊・因縁・たたり』（かもがわ出版）や『現代こころ模様——エホバの証人、ヤマギシ会に見る』（新日本選書）といった本を書いてきた人だけに、カルトや迷信に対する厳しい視線は随所に読みとれる。これはつまり、マルクス主義とか科学的唯物論とかを論じる以前の、素朴な正義感と反骨精神の表れではないか、とブルジョワ新聞の元記者は失礼ながら思ったのだった。

